

# 移民史に残る紀州の真珠貝ダイバー

—西オーストラリア ブルームを訪ねて—

ひがし  
東 悦子

1. はじめに
2. オーストラリアと紀州移民
3. ブルームの真珠ダイバー
4. おわりに

## 1. はじめに

ブルーム(Broome)は、西オーストラリアの北西部に位置するインド洋に面した町で、赤道に近く熱帯性気候で一年中暑さが厳しい。19世紀後半には南洋真珠養殖の中心地として栄えた町として知られているが、和歌山県紀南地方の人々にとっては、特に馴染み深い所である。

オーストラリアは、世界の真珠貝産地国の1つで、明治時代には、木曜島、ブルーム、ダーウィンは、有数の採貝地として名を馳せた。その頃、オーストラリアへは多くの和歌山県出身者が移民として渡っており、その多くは真珠貝採取のための契約労働者であった。ブルームにある日本人墓地には、707基919人の墓碑があり、和歌山県出身者の名が多く刻まれている。「ブルーム歴史博物館」<sup>1)</sup>や「パールラガー」<sup>2)</sup>を訪ねれば、真珠ダイバーとして移住した人々の足跡をたどることができる。

現在、ブルームとの交流史は、多くの紀州移民を輩出した太地町に受け継がれているようである。1981(昭和56)年、太地町とブルームは姉妹都市提携を結んでいる。また、2006(平成18)年、太地小学校とブルーム小学校の児童がテレビ会議での交流を図った。(『紀伊民報』2006/09/06)

2007(平成19)年3月、2泊3日の駆け足ではあったが、筆者はブルームを

訪れ、日本人移民の足跡を辿り、真珠貝ダイバーとして活躍した浜口博司氏と増田晃氏にお会いすることができた。本稿では、お二人の貴重な口述や現地の様子を報告することにより、移民史に残る紀州出身の真珠貝ダイバーの足跡を辿る。

## 2. オーストラリアと日本人移民

1883(明治16)年、英国人ジョン・ミラーに雇われて37人が渡豪し、トレス海峡で真珠貝の採取に従事したのが、外務省の許可を得た最初の正規契約労働者である。それ以前に遡ると、

“Possibly the earliest Japanese visitors to Western Australia were a group of Jugglers and acrobats called the Kyoto Troupe. (略)The artists came by way of Batavia (Jakarta) on the Eliza Blanche in November 1874 and Perth, Fremantle, York, Northam, Newcastle and Champion Bay During December 1874 and January 1875.”(Noreen Jones 2002 : p.24)

西オーストラリアを訪れた最初の日本人は、キオト軍団と呼ばれるジャグラーとアクロバットの一行であったとしている。また1878(明治11)年頃より邦人の渡豪が始まり、野波小次郎(島根県)が水夫として外国船に乗り込み木曜島に上陸し、真珠貝採取に従事していた。1881(明治14)年に中川民治(兵庫県)、1882(明治15)年に和歌山県人中山奇流や渡辺俊之助(広島県)が渡航し、邦人木曜島発展の先駆者となった。先に述べた1883(明治16)年、1886(明治19)年、および1888(明治21)年の3回に渡り、合計177人の日本人契約移民がオーストラリアに渡っている。明治30年には、全豪在留邦人数は2000人を突破し、木曜島で採貝労働に従事する者は900人に達し、その約8割を和歌山県人が占めたという。(今野・藤崎 1996等)

オーストラリアの真珠貝採取業は、木曜島、ダーウィン、ブルームがその中心地であったが、永田(2002)によると、ブルームの日本人移民については、1880年代初頭にはブルームにも入植地が開かれたが、当時その真珠貝採取業は英国出身者によって支配されていた。(略)日本人がいつブルームに来た

のかは定かでないが、1891(明治24)年にはブルームを中心とする西オーストラリアに322人の日本人が住んでいたと記録されている。(pp.24-25) 1901(明治34)年に移民制限法が導入された年には、3602人の日本人がおり、大半は真珠貝採取かさとうきび栽培に従事していた。彼らの多くは、和歌山県、広島県、山口県、熊本県などの農漁村出身者であった。(p.23)

1902年に移民制限法が実施された時に、全面的に禁止されることはなかったが、1962(明治37)年には、極めて少ない人数に制限される。

「第一次世界大戦中(1914~19年)、木曜島周辺での真珠貝採取は休止され、ブルームでは事業が縮小されたために、多くの日本人が帰国した。そのわずかな期間を除いて、そのあと第二次世界大戦までダイバー(潜水夫)やテンドー(命綱持ち)の分野では日本人が支配的な地位を占めていた。」(永田2002:29) 1941(昭和16)年、太平洋戦争勃発とともに、オーストラリア在住日本人は逮捕、拘束された。その後1952(昭和27)年に「豪州政府が同国業者の懇望に動かされて遂に日本人漁夫三十五名の雇用を承認したのは昭和二十七年六月のことで、これが戦後初めての日本人の渡豪であり、また本県人最初の採貝渡豪ともなつたわけである\*。」(『和歌山県移民史』p.964)\*旧漢字は新漢字に改めた。

以上概観したように、オーストラリアへの移民の中心的工作であった真珠貝採取業の隆盛は、当時高級ボタンの原材料として白蝶貝の貝殻が用いられた点にある。そこでは、勤勉で腕の良いダイバーが必要とされ、当時としては破格の高賃金であったことで、とりわけダイバーとしての力量を発揮した和歌山県南紀地方出身者の移住が増した。雇用者と被雇用者両者のニーズが合致した結果であるといえよう。

### 3. ブルームの真珠ダイバー

2007(平成19)年3月3日から同月5日、ブルームを訪れた。そこで、若い頃、真珠貝採取のダイバーとして活躍された和歌山県出身の浜口博氏と増田晃氏にお目にかかることができた。お二人に当時のご経験を思い出していただいた。伺ったお話の口述メモに従い、ブルームに来られた経緯やダイバーとしての生活の様子を紹介する。

### 3.1 浜口博司氏の口述

浜口博司氏は、昭和2年4月4日生まれ。和歌山県東牟婁郡下里町出身。ご実家は商業を営んでおられた。28歳の時にブルームへ来たそうで、昭和30年に渡豪ということになる。

#### 渡豪の経緯

ブルームへ来られた経緯は、太地町にかつてブルームに居た人がおり、その方が、現地(ブルーム)のオーナーに若い人を連れてくるようにと頼まれた。そして、たまたま話があったそうだ。ブルームへ来るのを決心された理由を尋ねたところ、「「やってみたら」と言われて。若い時はそのようなものだ」とおっしゃる。

その時、20数名一緒に来たそうだが、ブルームへ来たのは3人であったようだ。渡豪に際して羽田に集まった。85人乗りの飛行機で、みな日本人であった。政府の許可がおりるのに6ヶ月かかった。和歌山、四国、九州出身者がおり、年寄りもいたし、戦前ブルームにいた人もいた。男性ばかりであった。ダイバー(技術者)として呼び寄せたが、現地(ブルーム)で、それを学んだ人もいれば、ダイバーをしていた人もいた。

#### ダイバーの仕事について

浜口氏によると、ダイバーの仕事は、人のやっているのを見て自分で覚える。一人前になるまで2年かかる。住まいはオーナーが用意し、全員一緒であった。従って言語に関しては、日本語で話のできたので、特に英語は必要がなかった。

船は日本人の船、マライ人の船、シナ人の船もあったが、日本人ダイバーの船が多かった。当時、給料はポンドで支払われた。日本円にすると高額になった。

ダイバーとして7年、毎日8～9回、1回1時間仕事をした。1982-1997年にかけて、14年間は真珠の養殖をした。

和歌山への帰郷は、2001年まで毎年2回位帰った。2002年肺炎になって、(しばらく帰郷できなかったが)2004年2週間クイーンメリー号でまわった時

に立ち寄った。

### 真珠貝採取について

かごを体の前につけて、手で取った。ゼロの時もあり、いっぱい採れたときもある。(浜口さんが、後によびよせた人はいますか。)いない。儲かる時もある、儲からない時もある。責任がもてないから。

### 給料について

年末に何トンとれたか計算する。家族送金とこづかいに加えられる。事務所からのポケットマネーが30ポンド程度あった。一年一回清算。19tまで、20tまで、21t以上というような区分があり、1tくらいか決まっていた。

### 日本の習慣について

お正月にビールを飲むぐらい。何もないんやから。あるのは塩だけ。しょうゆも味噌もない。あったのは、シナのどろどろとしたしょうゆとシナの味噌。

### 日本人が集まって組合のようなものはあったか？

昔々(明治の頃の意)は、給料アップを要求した。(浜口氏らは)食料は、日本食を出して欲しいと要望。

### ことばについて

英語はここで生活する中で自然に覚えた。日本語は忘れない。しかし、書く方、漢字などは忘れる。

浜口氏は、「ブルームの土地の人は、友好的な人が多い。」と話されたが、ブルームに来られた際の印象については、*BROOME Through the lens of Master Photographer Fernande Kuypers (2002)* に記されている。

He came to Broome in 1955 from Shimosato-cho in the Wakayama Prefecture

with two others, Mr Maeda and Mr Masuda, to work as hard-hat divers for Male & Company. Initially they found Broome disappointing: "boring, sleepy town where not much happened - only three pubs and Sun Pictures. Nothing flourishing, only a few hundred white Australians and about 2000 mixed races and local Indigenous people". (p.17)

口述にあったように、1955(昭和30)年に増田氏、マエダ氏とともに3人で、マイル&カンパニーで真珠ダイバーとして働くためにブルームに来られた。最初のブルームの印象は、3軒のpubとサンピクチャー<sup>3)</sup>があるだけの退屈な町である。寂れた所で、たった数百人の白人と約二千人の様々な人種の人々と元来その地に住んでいた人々がいた。さらに最初のダイバーとしての仕事についても語っている。

'Hama' remembers his first dive: "It was an eerie feeling when the copper helmet was fitted on my head and the front glass was screwed in. I felt instant panic. The noise was shut and only the hissing of the air came through. We were on the water for most of the day, diving from 5 to 15 metres when the water was clear. Some dives went as deep as 50 metres and our longest journey out at sea lasted six weeks. (p.17)

銅製のヘルメットをかぶり、フロントグラスが閉じられた時、「えれえ\*気持ち」がした。パニックに陥った。外界の音は閉ざされ、送られてくる空気のシューっという音だけが聞こえた。海水が澄んでいれば5mから15mを潜り、その日のほとんどを海で過ごした。ダイバーの中には50mの深さに潜る者もいた。最長6週間海で仕事を続けた。  
(筆者要約)\*程度がはなはだしく「大変な」といった意と思われる。方言。

### 3.2 増田晃氏の口述

増田晃氏は、昭和9年生まれ。ご実家は船大工をしておられた。21歳の時(昭和30年)にブルームへ来た。

## 渡豪の経緯

アメリカに親戚もいたので、南米に行きたいと思っていた。当時、堺の鉄工所で働いていたが、12月23日、正月に帰省した折、ブルームの話があり、願書をだした。その後6ヶ月でブルームに来た。渡航費用は会社もちだったらしい。会社の名称は、ステレター・メール・カンパニー(ケンブリー・メールの父)である。

カンタス航空は、当時はプロペラ機で、羽田を出発し、6月17日にマニラで夕食。6月18日朝、ダーウィンに到着し、昼食と夕食を摂る。昼のステーキは中まで焼かない。それが正式でおいしい。6月19日朝着。先輩は船で沖にでとった。10日位会社のキャンプで寝泊りし、ベッドも決まっていた。その後すぐ仕事についた。

現在ブルームの繁華街となっているチャイナタウンは、日本人移民が住んだところだそうで、和歌山ボーディング、鹿児島ボーディング、伊予ボーディング、そして他の出身地の人々は、いろいろなところに分かれて住んだそうである。

## ダイバーの仕事について

ことばに関しては、マライの人が4人位いた。マライ語は覚えやすい。船では、それを使ってマライの人と話した。主に、ダイバー・日本人(2名)、テンダー・日本人(2名)、エンジニア・日本人、そして、デッキハンドはマライ人が多かった。船に日本人のコックはおらん。陸(おか)では、キャンプで集団生活をし、食事は順番でコックを務めた。

仕事は先輩を見て覚えた。先輩が言って(口頭で)教えてくれて、ダイバーのチャンスをもたらした。一潮(一週間)をブルームから北へ8時間、南へ20時間位行った海で真珠採取を行った。

## 真珠貝採取について

4月に大きなサイクロン<sup>4)</sup>があり、5、6、7月が最もよく採れる時である。海が澄んでいるので見やすい。盆すぎたらにごる。泥の中を歩くと見えないが貝の感覚で採る。見える貝はだれでも採る。2年トップを記録し、会

社の台帳にその記録があるそうだ。

採取船には9名が乗り込み、2名がダイバー、2名がテンドー。1名機関士。4名甲板士である。真珠貝がかご一杯になると信号を送り、船上からそれをひきあげる。そして、空のかごを降ろしてもらう。バイキという網で編んだかごで、ダイバーは胸の前につけている。真珠貝に天然真珠が入っていることがあるが、それを入れる専用の箱<sup>5)</sup>があり、それに入れてオーナーに渡す。それをオーナーが売り、何割かをダイバーに渡した。

若い時、仕事はえらかった(つらかったの意。方言)けど、苦勞っていても若いから(乗り越えられた)。深いところへ潜ると、海の底はきれいで、インド洋で海中の3つの山脈こえたら、夕方4時頃海底がものすごくきれいだった。1.5m程の海松があり、やわらかいが、5-6回触ると鉄みたいに硬くなる。

ダイバーは潜水病で死に至ることも稀でなかったが、それについて増田氏は、潜水病には3つの病気があったと話してくれた。どの段階に至るかは、水圧やその人の体によったという。

1. ローマテキ 錐でつく痛さ。10尋から5尋のところで2時間。治る。
2. ハウカス 半身不随の状態。もう一度海へ戻って治す。
3. パラダイス 痛い。目から火花がでる。1回24時間もぐって、だめならまた24時間。2-3日で効果がないと亡くなる。この時、もう一人もぐってエアを調整する。ガラスのところにケリッ(調整ネジ)がある。

潜水病については、小川(1976)に詳しい。そちらでは、ロイマチス、ハウカース、パレライスとされている。

腕のいいダイバーになるには、(A) Youth(若さ) (B) Brains(頭脳) (C) Robust health, and sound wind and limb(頑健な体力と健康) (D) Ambition (野心) (Noreen Jones 2002 : p.106、2003 : p.112)が必須条件だそうだ。増田氏ご自身は、潜水病にかかることもなく「体が強かったから」恵まれていたと繰り返された。

## 給料について

50年前、1ドル360円の時代の頃、1ポンドは、オーストラリアドルで400



円であった。本給30ポンド、親方から13ポンド、それに貝の水揚げによって給料が決まった。本給30ポンドは家族送金に当てられた。

### ことばについて

現地の方と結婚されているが、家庭では英語で話されるそう。お子さんに日本語は教えなかったそう。日本語を教える免許を持っていないからとおっしゃる。日本には、18年位戻っていないそう。それ以前、3人のお子さんを連れて、大阪、京都、和歌山と訪れたそう。

真珠採取船では、マレー語も使ったそうだが、マレーシアを旅行された時に困らなかったという。

### 3.3 日本人墓地を訪ねて

多くのダイバーの方々が、ブルームの日本人墓地に葬られている。(写真資料3.)このことはダイバーの仕事がいかに危険と背中合わせであったかを物語っている。一見して、和歌山、鹿児島、伊予の方の墓が多いことが目についた。永田(2002)によると、「ダイバーの仕事は非常に危険であった。死亡率は年間およそ10パーセントととても高く、1941年までのおよそ半世紀の間に木曜島で合計516人、ブルームで977人の日本人ダイバーが亡くなっている。」(p.26)

墓地の入り口には、英語と日本語の石碑があり次のように記されている。(写真資料3.)

このブルーム日本人墓地の歴史は古く、まさに当地真珠業創生ママの期に遡る。そしてこの西北部の小さな町と日本との親密なかかわりを物語っている。(略)真珠業に携わった人達のうち、かなりの人が海に溺れあるいは潜水病のため亡くなっている。大きな石から作られた方尖塔には、1908年のサイクロンで亡くなった人達の名がはっきりと刻まれている。同じようにそこは1887年と1935年のサイクロンでそれぞれ140名の人達が亡くなったことを記されている。1914年には33人が潜水病で亡くなっている。この墓地には707基919名の墓碑があり、その大部分は色のある浜の岩石\*をもって造られている。\*英文石碑では、“colored beach rocks”

増田さんはお盆に必ずお参りされるそうだ。友人のお墓もあるそうで、こちらには時々お参りされているそうだ。近年、お墓にいたずらする子供がいるそうで墓石が無残に割られているものがあった。そのような墓石を修復もしている。ブルーム博物館にも修復中の墓石やまだ2つに割られたままの墓石がいくつも並べられていた。監視カメラがつけられていたが、残念なことに、2007(平成19)年9月5日夜、日本人墓地で墓石118基が押し倒され、その多くが破損したと報じられている。だれの仕業であるかは判明していない。(『日テレNEWS24』2007/09/07)

和歌山県の紀南地方の多くの人々がダイバーとして渡豪した主たる理由として、仕事で得る収入に魅力があったことは確かであろうが、日本人墓地を訪ねてみて実感したことは、真珠貝採取の過酷さや危険の度合いとバランスがとれるものであったかどうかということである。

増田氏のお話を伺ううちに、生来海の好きな方だという風を感じられた。紀南地方で海と共に暮らしてきた人々には、海を生きがいとする人が多かっただろう。海の仕事の危険も魅力もすべて承知のうえ、日本を遠く離れた地であっても、海と生きる仕事であるからこそ明治から昭和へと続く多くの移民を輩出したといえないだろうか。

#### 4. おわりに

和歌山県は有数の移民県として知られており、殊にアメリカ、カナダ、オーストラリアの地において、移民史上にその名を残している方々が少なくない。ブルームでご自身の事を語ってくださった浜口氏や増田氏は、明治から昭和にかけてのオーストラリア移民史の最後を飾る方々であった。現在では、移民として先述の地に渡った先駆者たちの時代から3世、4世の世代にいたっている。本県においては、紀南地方などの特にゆかりの深い地域では、今もなお、親戚のだれそれが移民として…ということが語られるが、若い世代では、「紀州移民」は身近なことではなくなりつつある。

これまで、紀州太地村出身の筋師千代市氏が自らの移民としての経験から著した『英語獨案内』やハワイに多くの和歌山県民を輩出した背景を考察してきた。(東・江利川 2004、東 2005、東 2006)有数の移民県として知られる

紀州和歌山に住む私たちは、海外へ渡り、苦労を重ねながらも、それぞれの地において新たな生活を築いていった先人たちのことを知り、次の世代へ語り継いでゆく使命があるのではないだろうか。

最後に、本稿における記述と、浜口氏や増田氏の実際の口述との間にずれが生じているとすれば、それは筆者の拙い口述筆記のためである。今後の課題として、息の長い調査と検証を重ねてゆくことが必要であろう。

**【謝辞】** 体調のすぐれない中をお会いくださった浜口博司氏、快く迎えてくださった奥様のパール氏、真珠ダイバーゆかりの地をご案内くださり、お話を聞かせてくださった増田晃氏に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございます。またブルームを訪れるにあたり、浜口氏や増田氏にコンタクトをとってくださったブルーム在住の大前満希子氏、大前氏をご紹介くださった太地町役場の瀬戸睦史氏、瀬戸氏をご紹介くださった太地町小学校校長塩見善則氏、皆様のご厚意に感謝申し上げます。文献の検索にあたり、和歌山市民図書館移民資料室の中谷智樹氏や職員の方にお世話になりました。ありがとうございます。

2007年夏に浜口博司氏が逝去されたとの知らせをうけた。貴重なお話を聞かせてくださったことに深謝し、謹んで哀悼の意を表します。2007年11月

## 註

- 1) Broom Historical Society Museum ブルームの歴史を伝える品々が展示されている博物館。真珠ダイバーに纏わる品々や真珠養殖最盛期の日本人移民の様子、第二次世界大戦時の日本軍による攻撃を示す展示物もある。
- 2) Pearl Luggers 真珠採取船が保存され、真珠ダイバーが使用したヘルメットを始め様々な道具が展示されている。売店では真珠や真珠貝細工も販売されている。(写真資料4.)
- 3) Sun Pictures 半野外映画館。1897年日本人の雑貨店として建てられたものが、1926年より映画館になった。(写真資料2.)
- 4) cyclone インド洋に発生する熱帯低気圧。
- 5) pearl keeping box パールボックス 真珠一粒を入れるだけの穴があり、そこに真珠を入れると鍵を開けない限り、その穴からだすことはできない仕組みになっている。

## 参考文献

- 東悦子・江利川春雄(2004)「紀州太地村で刊行された移民用の英語教材——筋氏千代市『英語獨案内』の文化史的価値——」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第24号
- 東悦子(2005)「移民用英語教材——筋師千代市『英語獨案内』——再考」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第26号
- (2006)「紀州移民についての一考察——ハワイと和歌山県人——」『和歌山大学紀州経済史文化史研究所紀要』第27号
- Anne Bloemen and Bonita Mason(Edit)(2002) *BROOME Through the lens of Master Photographer Fernande Kuypers* Broom Historical Society
- 今野敏彦・藤崎康夫(編・著)(1996)『移民史II アジア・オセアニア編』新泉社
- 『紀伊民報』2006年9月6日
- 永田由利子(2002)『オーストラリア日系人強制収容の記録』高文研
- Noreen Jones (2002) *NUMBER 2 HOME A story of Japanese Pioneers in Australia* Fremantle Arts Centre Press
- ノリーン・ジョーンズ(著)北條正司・白籟佐紀枝・菅紀子(訳)(2003)『第二の故郷』創風社出版
- 小川平(1976)『アラフラ海の真珠』あゆみ出版
- 和歌山県(1957)『和歌山県移民史』和歌山県

## 参考ウェブサイト

和歌山市民図書館移民資料室

[http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib\\_doc/imin-top.htm](http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib_doc/imin-top.htm)

太地町公式ホームページ

[http://www.town.taiji.wakayama.jp/tyousei/sub\\_ayumi.html](http://www.town.taiji.wakayama.jp/tyousei/sub_ayumi.html)

日テレNEWS24

<http://www.ntv.co.jp/news/index.html>

【資料1】 オーストラリア移民史概観 〈明治初期～昭和37年〉

明治	1878(明治11)年ごろ	○邦人の渡豪始まる 明治11年頃野波小次郎(島根県人)が水夫として外国船に乗り込み、木曜島に上陸、真珠貝採取船のポンプ係りとなる
	1882(明治15)年	○和歌山県人中山奇流が渡豪、木曜島に 14年に中川民治(兵庫県)、15年に中山奇流、渡辺俊之(広島県)が渡航。邦人木曜島発展の先駆者
	1883(明治16)年	○英国人ジョン・ミラーに雇われ37人渡豪 トレス海峡で真珠貝の採取に従事、外務省の許可を得た最初の正規契約労働である。16年、19年、21年の3回で、計177名の日本人契約移民が渡豪
	1887(明治20)年代	○和歌山県人は、明治21、2年頃から木曜島へ渡航 神戸方面から49名渡航、うち7名和歌山県人
	1890(明治23)年	○オーストラリア真珠会社が、15人のダイバーをダーウィンに呼び寄せる ○小峯磯吉香港から木曜島に渡る
	1891(明治24)年ごろ	○ブルームを中心とする西オーストラリアに322人の日本人在住
	1892(明治25)年	○日本吉佐移民会社が豪州移民の取扱開始 この頃、横浜移民、神戸渡航、海外渡航、厚生移民も豪州移民の取扱開始
	1897(明治30)年	○全豪在留邦人数は2000人を突破 渡航者は、クインズランドの砂糖耕地や西豪州および木曜島の採貝事業に従事 ○木曜島における邦人採貝労働従事者900人に達する 当時同島採貝全従事者1500人の6割にあたる。さらに和歌山県人が、その約8割を占める ○日本政府はクインズランドおよび木曜島への渡航を禁止する クインズランドの排日運動の影響
	1898(明治31)年12月	○クインズランド州政府、『真珠及び海鼠漁業法』を修正実施 クインズランド州内で、日系人の真珠貝海鼠漁業船を所有または借船して、独立経営に従事することを禁止
	1901(明治34)年	○オーストラリア連邦発足 ○3602人の日本人が在住 大半は真珠貝採取あるいはさとうきび栽培の契約労働者
	1902(明治35)年1月	○移民制限法実施 全く禁止されることはなかったが、明治37年12月に極めて少数に制限される
昭和	1941(昭和16)年	○太平洋戦争勃発。オーストラリア在住日本人は逮捕、拘束される 日本人は4ヶ所の収容所に

昭和	1952(昭和27)年 6月	○オーストラリア政府が日本人漁夫35人の雇用を承認、戦後初めての日本人の渡豪となる
	1962(昭和37)年 1月	○オーストラリアへの採貝船団の出漁中止決定

以下の文献を参照した。

今野敏彦・藤崎康夫(編・著)(1996)『移民史II アジア・オセアニア編』新泉社

永田由利子(2002)『オーストラリア日系人強制収容の記録』高文研

和歌山県(1957)『和歌山県移民史』和歌山県

和歌山市民図書館移民資料室

[http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib\\_doc/imin-top.htm](http://www.lib.city.wakayama.wakayama.jp/wkclib_doc/imin-top.htm)

## 【資料2】真珠ダイバー関連語句リスト

パールラガー、ラガー	真珠船
テンドー	命綱もち
ダイバー	潜水夫
デッキハンドル	操縦士
クロー	甲板員(クルー)
一尋 <sup>ひろ</sup>	六尺、約1.8メートル
一潮 <sup>しお</sup>	一週間
ケリップ	ヘルメットのガラス部分についている調整ネジ
バイキ	真珠貝を入れる網。貝袋。ダイバーはそれを体につけた
パール・キーピング・ボックス	天然真珠が取れたときに、それを入れる真珠箱
ガントン	潜水病のダイバーを海の中に吊り下げる療法

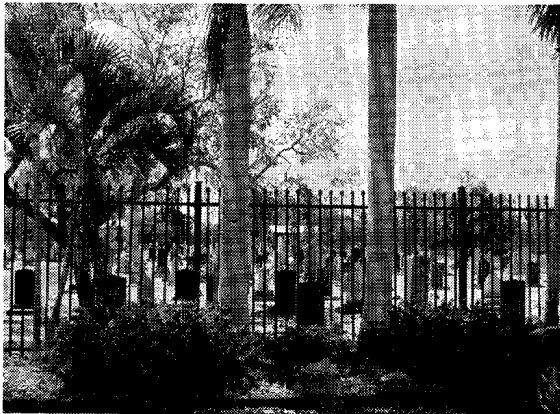
【写真資料】



1. ブルーム空港

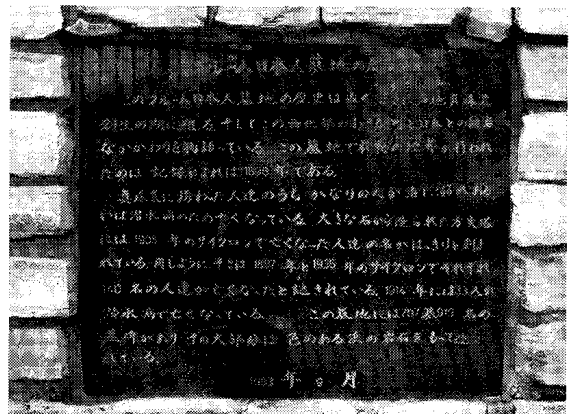


2. サンピクチャー



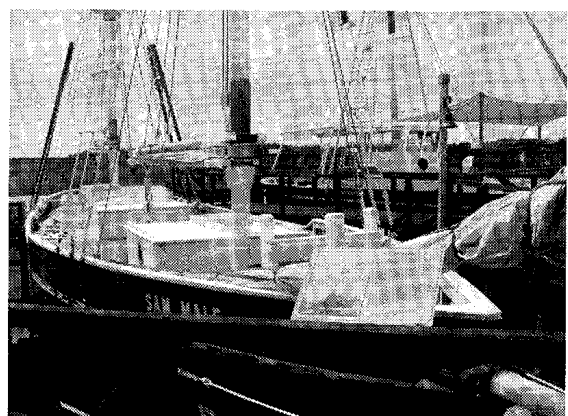
3. ブルーム日本人墓地とその入口にある石碑

日本語と英語、2基の石碑がある。フェンスに囲まれて、墓石はすべて西の方向を向いている。



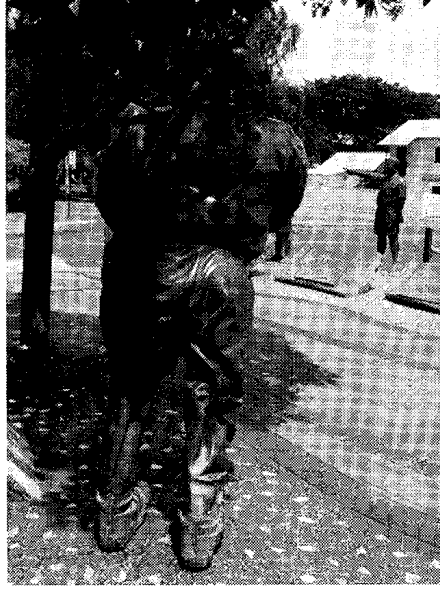
4. パールラガー

真珠採取船が保存されている。

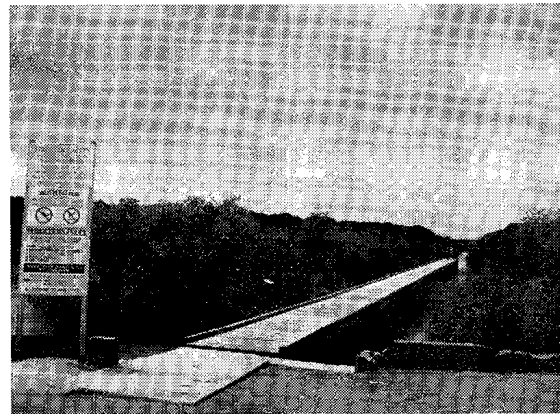




5. 真珠ダイバーの像



6. 白蝶貝の貝殻



7. マングローブに囲まれた栈橋